
「おかれり」

麦子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「おかえり」

【NZマーク】

N63050

【作者名】

妻子

【あらすじ】

彼女が好きになった彼は、真っ赤な血が似合う人でした。

(前書き)

冒頭、ほんの少しだけ“血”の描写があります。

あの日。夜の街灯に照らされて返り血を浴びた哀しそうな眼をしたあなたを一目見て、身も心も奪われてしまつたあの日から、私は“憧れ”から脱出したかったのです。

さつきから降り続いている小雨の存在を、鬱陶しいとは思わなくなつてきました。寧ろ、シャワーを浴びているような気持ちのよい心地です。寒さのせいで思考回路も大分危うくなつてきているのかも知れません。階段に座つて、彼を待つこと…何時間でしょうか。時間さえ忘れて待つっているなんて、彼が知つたら気味悪がることでしょう。“ウザイ”と言われるかもしれません。それでも待つことをやめられないのは、やはり彼のことが好きだからなのでしょうね。例え片想いでも。

いやあ。

足元を見ると、擦り寄つてくる猫が一匹いらっしゃいました。彼の飼い猫です。いいですねえ、きみは。あの人の傍にいられて。温もりも吐息も一番近くで感じられることができて。雨で濡れてしまつた毛並みを撫でてやると気持ち良さそうに尻尾をふつて私の膝の上に座ってくれました。ああ、なんて愛らしきものなのでしょう。

にやあ。

「私は、寒くないですよ。きみは？」

にやあ。

「そうですか、大丈夫なのですか。きみの『主人様、遅いですねえ』にい。

「そうですね、濡れていなければいいのですが

にやあ！

「どうしたのですか」

「お前、何やつてんの？」

待ちわびていた声に顔を上げると、そこには怪訝な表情を浮かべて私を見下している彼がビニール傘片手に立っていました。猫はするりと私の膝から離れて彼の足に擦り寄っています。気まぐれ屋なところも、また愛らしいです。

「てか、何？お前ずぶ濡れじゃん

「傘、持っていたんですね。よかつた、濡れていなくて

「コンビニで買ったんだよ。…なあ、もしかしてお前…」

「あ、はい。あなたのことを待っていました」

「は？マジかよ…キモチワフリイ事してんなよな

そう呟いた彼は猫を抱えて、私の横を擦り抜けて二階の自分の部屋に入つていつてしまわれました。残念です。やはり、気味悪いと思われてしまいました。それでも、あなたが今日も無事に帰つてくることができたのなら私にとってこれ以上の幸せはありません。くしゅん。そろそろ帰つたほうがよいのかもしれません。そう思い、鼻

をすすりながら立ち上がるうとしたら頭に何か大きくてやわらかなものが覆いかぶさつてきました。手にとつてみると、それはバスタオルでした。上を見上げれば、部屋に入ってしまったはずの彼が真っ直ぐに私を見つめていました。それだけで泣きそうになるほど嬉しかったのに、

「…お前も、早く帰れ」

その声色がとても優しくて胸がきゅんと苦しくなりました。明日こそは「お帰りなさい」と、言えたら。少しでも“憧れ”よりもさらにはあなたに近付けることができたら。

例え、あなたが犯罪者だろうとも、人を殺しかけたお人であろうとも、私の張り裂けそうなこの甘やかな想いにはなんの偽りもないのですから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6305o/>

「おかえり」

2010年11月2日13時46分発行